

子どもの声つうしん



発行 特定非営利活動法人チャイルドラインみやぎ 2013年3月1日 <第5号>

チャイルドラインは、18歳までの子どもがかける電話です。1986年、イギリスのBBC放送局が、「子どもの虐待」をテーマにした番組を制作したのをきっかけにして誕生しました。日本でもこの電話をモデルに、各地で設置されるようになりました。宮城県では、1999年から準備が進められ、2001年10月に団体が設立、2002年3月から電話受付を始めました。

現在、全国のチャイルドラインが協力し合って、0120-99-7777で電話を受けています。2011年度には全国の子どもたちから799,713件のアクセスがありました。

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、チャイルドラインみやぎは電話受付ができなくなり、7月に再開をしました。その間、全国のチャイルドラインで、被災地の子どもの電話を受け続けてくれました。

震災から2年を迎え、チャイルドラインのデータから見える被災地の子どもの状況を検証してみます。

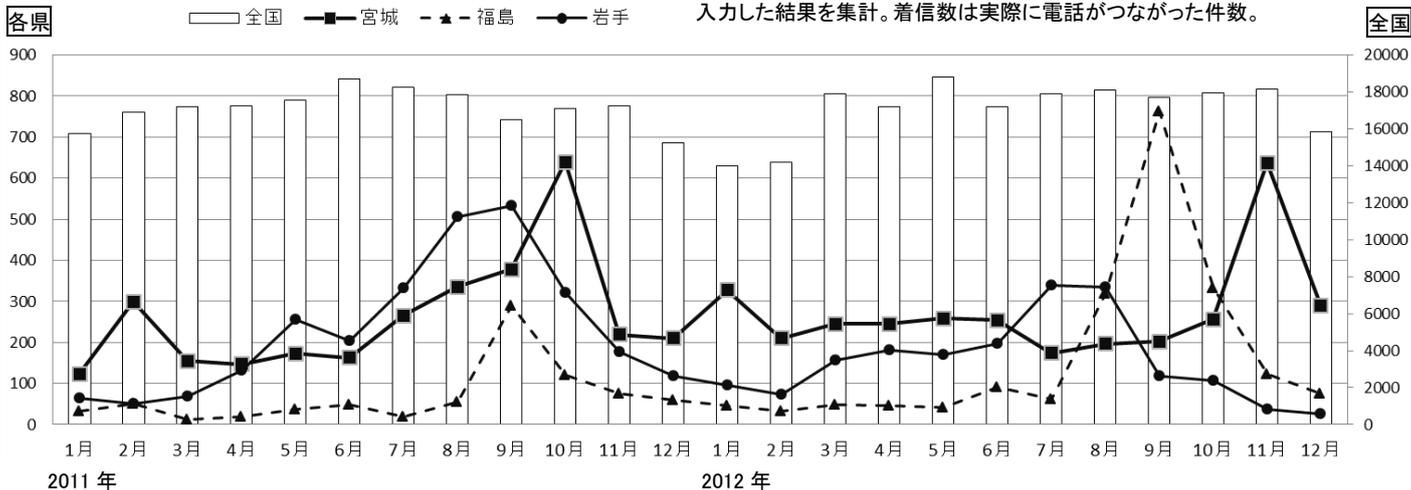
電話件数の推移

	2009年度	2010年度	2011年度
トラフィックデータ	725,301件	740,143件	799,713件
年間着信数	235,941件	247,282件	199,113件
1か月の平均着信数	19,662件	19,109件	16,593件
宮城県年間発信数	11,023件	10,512件	14,583件
岩手県年間発信数	2,326件	1,802件	11,622件
福島県年間発信数	872件	1,265件	4,805件

トラフィックデータは、0120-99-7777への電話。NTTコミュニケーションズの提供するトラフィック調査ツールによりデータ取得。通話成立に至らなかった着信数も含む。

2011年4月～2012年12月着信数

※全国のチャイルドラインの通話の結果を、チャイルドラインデータベースに入力した結果を集計。着信数は実際に電話につながった件数。



2011年度、全国の年間着信件数は減少しましたが、被災3県は増加しています。2011年7月から10月にかけて、2012年6月から11月にかけての増加が著しいのは、チャイルドライン支援センターが被災3県に対してカード配布の支援を行ったことで増加したと考えられます。

岩手は全国と似通った傾向を示しています。沿岸部の津波被害は大きいものですが、電話の件数にはそれほど影響はなかったように見受けられます。

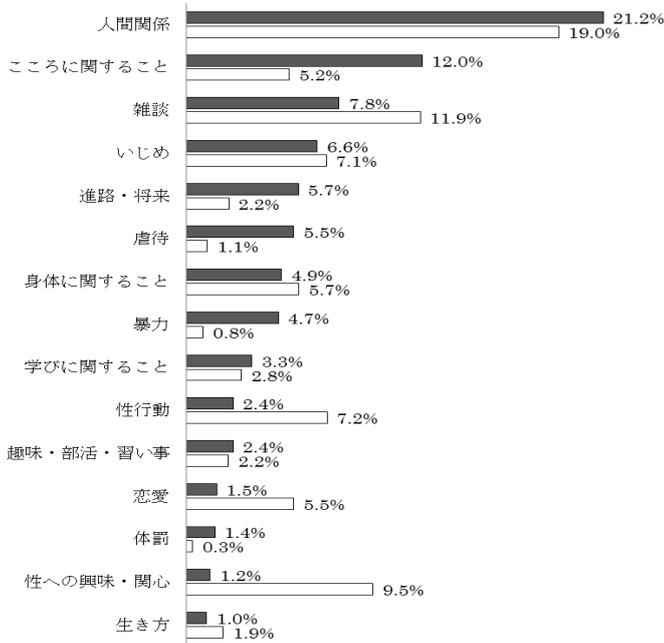
福島は、この時期にはまだ地元チャイルドラインは無く広報ができずにいたため、件数はごく少なかったのですが、被災地としてカードが配られて、初めてチャイルドラインの存在を知った子どもがかけてきたようです。

宮城は震災があった3月からしばらくは毎月同じくらいの電話数でしたが、仮設住宅の入居が始まった頃から増加し始め、カード配布期に急上昇し、その度コンスタントにかかり続け、2012年11月のカード配布時期に再び上昇しています。1～2月の増加は、進学などの問題がかかわっていると考えられます。

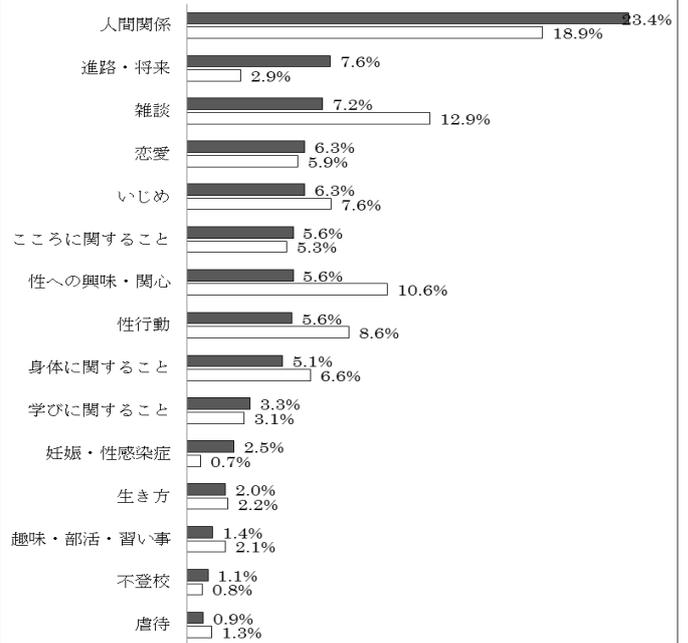
電話内容について

(宮城県の上位から順に記載。下位は省略。■は宮城、□は全国のパーセンテージを表しています。)

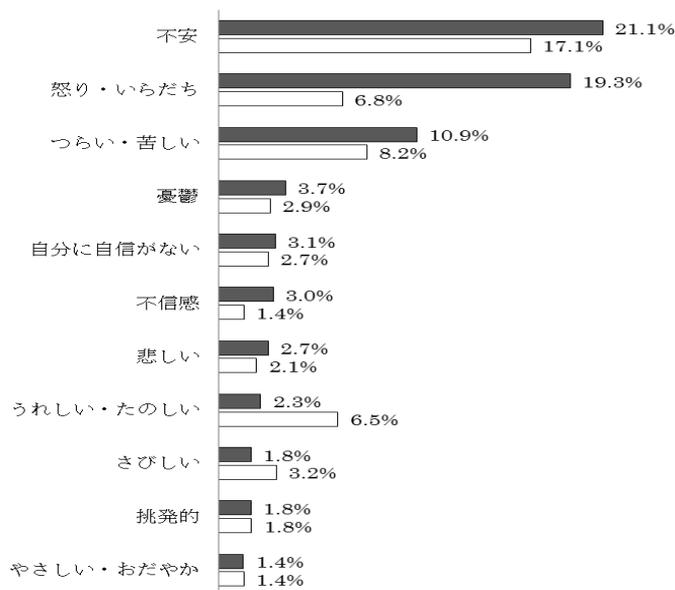
事柄別集計 (2011年1月～12月)



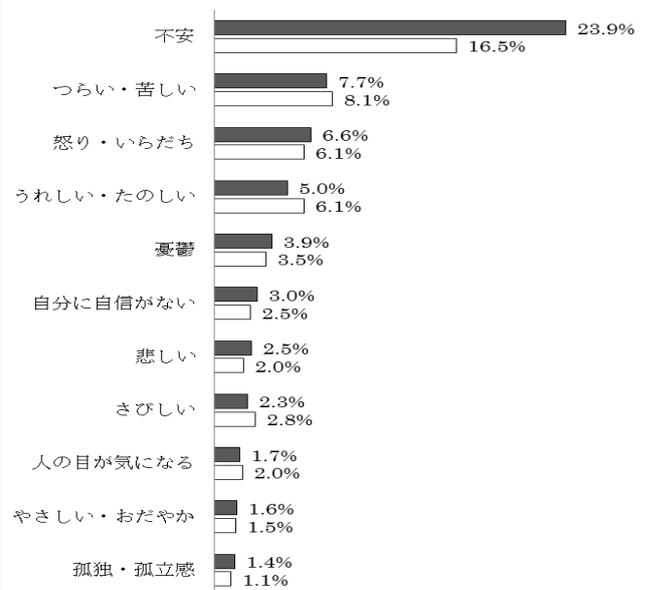
事柄別集計 (2012年1月～12月)



気持別集計 (2011年1～12月)



気持別集計 (2012年1～12月)

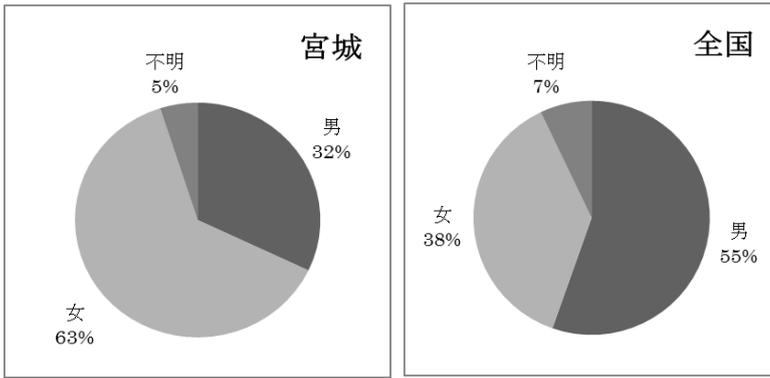


<事柄別集計> 子どもの話でいつも1位を占めるのは「人間関係」です。震災後の特徴として、全国では「雑談」が2位であるのに対し、宮城県の子どもの2011年の2位は「心に関すること」、2012年の2位は「進路・将来」でした。2011年は「虐待」「暴力」について全国との差が際立っています。震災後子どもたちの身に起こったことを想像させる数値です。2012年になって、「恋愛」が4位に浮上していますが、「妊娠・性感染症」などが増加していることと考え合わせると、恋愛話として電話をかけたが、本当に相談したかったことを言えなかったのではないかと懸念があります。

<気持別集計> 電話の受け手が感じた子どもの気持ちを集計したものです。2011年、宮城県の「怒り・いらだち」が突出しています。上位から7位まで「不安」「怒り・いらだち」「つらい・苦しい」「憂鬱」「自信がない」「不信感」「悲しい」と続き、8位になってやっと「うれしい・たのしい」が出てきます。そのほかにも「不信感」「挑発的」など、子どもの心の荒れた状態を反映しています。2012年になって、少し落ち着きを取り戻したのか「うれしい・たのしい」が4位になりました。その他のマイナス感情は少しずつ減少していますが、「不安」は大きく増加しています。また、2011年にはなかった「孤独・孤立感」がランクに入ってきています。震災後の孤独死の予防が叫ばれていますが、平時でも1日1.7人が自殺している子どもの現状を忘れずに、子どもたちを注意深く見ていく必要があると思います。

かけ手（子ども）プロフィール／2011年1～12月

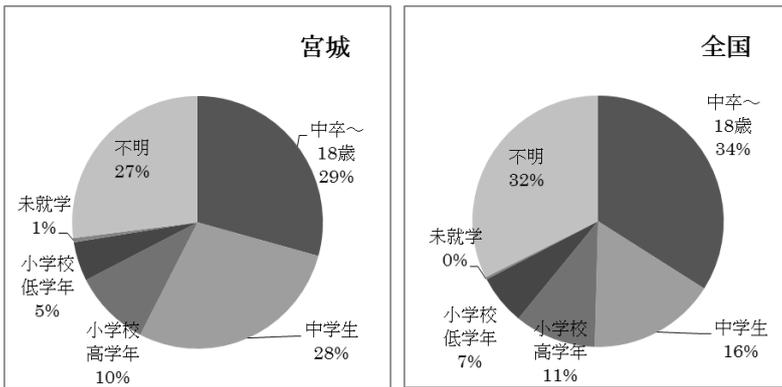
（1）性別



（1）性別

チャイルドラインにかけてくる子どもの男女の割合は、いつも男子が多くなっている。前頁の「事柄別」集計と合わせて分析すると、男の子は「性」に関する電話が多くを占めている。面と向かっては聞けないことを、顔が見えない電話だからこそ話すことができる。しかし、その中でいつも感じるのは、男子は自分の体のことを学ぶ機会が少なく、誤った情報に振り回されているということだ。適切な性教育が望まれる。

（2）年齢

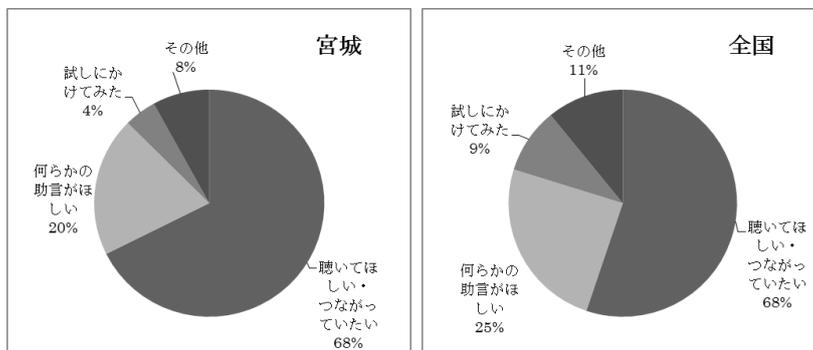


（2）年齢

チャイルドラインでは、特別のことがない限り、子どもに対し、こちらから年齢を聞くことはしないため、年齢はあくまでも受け手の主観で記録している。

チャイルドラインが始まって10年が経過している。始めた当時は、小学生が半数ほどを占め、次いで中学生、高校生の順だったが、最近では、中学生以上が半数を占めている。小学生は主にいじめや友達関係の話が多いが、学年が上がるにつれて問題は多様化、深刻化してきている。

（3）電話をかけた動機



（3）電話をかけた動機

チャイルドラインは、子どもの話を良く聴き、気持ちを受け止めるとともに、子どもが考え、どうするかを決めていくのに寄り添うという姿勢をとっている。ほとんどの場合は、現実にはなかなか解決できないが、自分一人で抱えているのはつらいため、「誰かに聴いてほしい」という電話だが、子どもの中には「どうしたらいいですか」と、性急に答えを求める子もいる。話すうちに考えが整理され、自分で結論を出していく場合が多い。子どもの持っている「力」を感じることができる。

被災直後の子どもの様子

非営利活動法人チャイルドラインみやぎは震災後、全国からの支援を受け、子どもに関わる団体・個人と共に「災害子ども支援ネットワークみやぎ」を設立。直接被災地へ出向いての支援や物資支援等も行いました。

また、仮設住宅を中心とする子どもたちの調査や支援者の研修などを行う「サポートセンター支援業務」を宮城県の委託により実施してきました。その中で見られた子どもの様子について報告します。

2011年3月～4月 避難所に子どもの遊び場を設置、スタッフを派遣。

- ・小学生であっても親から離れられない子どもがいた。
- ・ときどき奇声をあげる子どもがいた。
- ・暴力的な行動・言葉づかいが見られた。
- ・スタッフに甘える、スタッフを独り占めしたがるなど、自分を見てほしいという気持ちが強かった。
- ・スタッフに頼りたい反面、いずれいなくなってしまう人だから心を開かない場面もあった。
- ・会話の中で「友達が流れた」などという言葉さらっと使われてスタッフがとまどった。
- ・寂しさ、不安を抱えている。
- ・津波ごっこ・地震ごっこが見られた。

震災後にチャイルドラインにかかった電話（プライバシーに配慮し、再構成しています。）

震災直後

- ・地震、津波、余震が怖い ・家が流された ・家族、親しい人がなくなった ・進学できるか ・食べるものがない
- ・あそべない、部活動が出来ない ・避難所にいる。着替えする場所もない。・避難所はプライバシーがない。疲れた。
- ・地震後家族となかなか会えなかった ・放射能は大丈夫か ・テレビで震災の様子を見ると吐き気がする
- ・自分も死んだらよかったのかと思う

震災から半年～2年

- ・避難所に入れた人は支援物資をもらっているのにうちは壊れた家の2階に住んでいて何ももらえない。
- ・父の仕事がなくなった。毎日両親が喧嘩している。家計のことを考えて進学はあきらめる。
- ・仮設に4人で住んでいる。息がつまりそう。 ・学校が統合して人数が増え、クラスが窮屈になった。
- ・地震の日のことを思い出す。避難所はとてもしやだった。 ・余震が続いて不安。



宮城県の子どもの現状

- ・命を落とした子ども 327人 行方不明 35人（平成24年8月31日現在）
- ・子どもへの暴力：取材の過熱・外部ボランティアからの性被害・不審者の子ども撮影・避難先でのいじめ・虐待
- ・進まない学校の復旧・教育予算不十分：被災学校の同居。通学に時間がかかる。教材、備品が整えられない。
- ・住宅事情：仮設住宅は宮城県内15市町に406団地 22,095戸（H24年12月28日 宮城県）
- ・遊び場、居場所がない：校庭、公園は仮設が建つなど遊び場がない。仮設では落ち着いて勉強できない。
- ・貧困：保護者の就労が回復しないため、学校納付金が納められない。子どもが進学をあきらめる。
- ・本音を言えない子どもたち：大人が回復していないので子どもは元気にふるまっている。
忘れられない記憶に悩む子どもたち。子どもの中に蓄積される「怒り」

今後の課題と提案

震災後2年を経過し、復興の兆しが見え始めているところもありますが、復興住宅の建設は進まず、仮設住宅入居の期間延長の方針が打ち出されるなど、この2年間我慢を強いられてきた被災者にとっては希望の灯がどんどん遠ざかるような思いにとらわれることも多くなっているのではないのでしょうか。

子どもたちは、大人が元気がないと、自分たちがしっかりしなければ、とか、心配をかけるまいとして明るく振舞っています。しかし、大人も子どもも我慢の限界を超えたときに、どのような状況になるのかが懸念されます。

阪神淡路大震災の例をみても、2年を過ぎてから子どもの問題が噴出したといえます。今後、子どもたちに対して、できるだけことをしていかねばなりません。

まず必要なことは、子どもが話せる環境と、遊べる環境をつくることです。子どもたちはもともと生きる力を持っています。それを阻害する要因は、子どもを否定したり、虐待したり、暴力をふるうなど、子どもの尊厳を傷つけ、人権を侵害する行為です。子どもの話を良く聴き、信じて、待つことで、子どもたちはきっと本来の姿を取り戻していくことでしょう。

そして、忘れてはならないのが「遊び」です。遊びには、時間、空間、仲間の3つの「間」が必要と言われます。遠距離通学で時間を奪われ、仮設住宅で空間を十分持たず、避難生活で仲間と離れる、このような経験をしている子どもも多いと思われます。たとえば、学校の中にわずかなスペースでもよいので、子どもが自由に居られる空間をつくれませんか。仮設住宅の集会所の片隅に子どもの居場所はつくれませんか。子どものために場所を貸してくれる行政や企業はないのでしょうか。もし、そんな場所があれば、私たちNPOが支援者を養成したり、必要な備品をそろえたりすることはできます。

一緒に子どもの未来を考えていただける方からのご連絡をお待ちしています。

ひとりでも多くの子どもの声を聴くために チャイルドラインへのご支援をお願いします！

- ① ご寄付いただける場合：郵便振替口座 02280-5-49458 加入者名「チャイルドラインみやぎ」へご送金
- ② 支援会員になっていただける場合：年間1口2000円 上記口座へ、支援会員と口数をご記入の上ご送金
- ③ 電話受け手として活動していただく：春・秋2回実施される子どもサポーターズ養成講座を受講していただけます。
- ④ イベントボランティアとして活動していただく：子どもにチャイルドラインを知らせるイベントを随時行う際に
お手伝いいただけます。 ※③④についてはチャイルドラインみやぎ宛てお問い合わせください。

チャイルドラインは
全国どこからでもフリーダイヤル！！
電話番号は 0120-99-7777
受付時間 月～土 午後4時～9時
全国フリーダイヤルに関するお問い合わせ
特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター
03-5312-0886

発行：特定非営利活動法人チャイルドラインみやぎ
〒981-0954 仙台市青葉区川平 1-16-5 スカイハイツ 102
TEL・FAX：022-279-7210
（開局時間：平日9時半～17時）
E-mail：c.l.miyagi@viola.ocn.ne.jp

